



一貫コース通信

終戦から77年を迎えて

8月15日を迎え、太平洋戦争（日本呼称：大東亜戦争）の終結から77年となる。もちろん私自身、戦争など経験したことはなく、親族の戦争経験者の数も大きく減っており、終戦から76年目までは“いつもの”終戦の日ということでこの日を捉えてしまっていたのかもしれない。しかし、ロシアのウクライナ侵攻や直近の台湾海峡における緊張状態などにより、8月6日・9日（広島・長崎原爆投下）を始め、今年は戦争への意識が圧倒的に変わった。

マス・メディアや一般大衆にも大きく誤解されているかもしれないが、そもそも8月15日は終戦の日ではない。太平洋戦争を集結へと向かわせたポツダム宣言を日本政府が受理しようと決定したのは8月14日であり、8月15日以降も旧ソ連の侵攻（8月8日に宣戦布告）は続いており、南樺太や千島列島での防衛戦は9月5日まで続いていた。世界的にはポツダム宣言を正式に受諾した9月2日を終戦の日（連合国側の戦勝・終戦記念日）とするのが一般的である。

では、8月15日とは一体何の日なのか。これは「昭和天皇による肉声をラジオ越しに初めて聞いた“玉音放送”によって戦争終結が言い渡された」という日なのである。このことから、この日が“いわゆる”終戦の日となったのだろう。天皇を中心とした君主制（現在は立憲君主制）であった日本として、この日は衝撃的なものだったに違いない。そして後に、日本政府の閣議決定により、8月15日は“戦没者を追悼し平和を祈念する日”という正式名称となったのである。

“戦没者”とは、“戦死者（戦闘行為による死者）＝230万人”と“空襲の犠牲者など＝80万人”を包括したものである。つまり、沖縄戦や原爆の被爆者なども含まれる。こういった人たちへの追悼と平和への決意を示すため、毎年、日本武道館において戦没者慰霊式典が執り行われ、天皇陛下、内閣総理大臣始め三権の長、そして遺族の方々が一堂に会し、反戦を訴え続けている。

終戦から77年ともなれば、戦争経験者の高齢化が進み、いずれは伝え手がなくなってしまふ。そうなれば、また同じ過ち＝惨劇が繰り返される可能性が出てきてしまう（現にいまも起きている）。ここで大切なのは、ニュースの向こう側の世界を他人ゴトではなく自分ゴトとして、頭を働かせ、心を震わせることなのではないかと思う。自分が、家族が、友人が、そして大切な人が、本当に酷い目にあうかもしれないと、考えただけで心が苦しい。そしてその危機は、決して遠くないところまで迫ってきている。

世界各国の悲惨な現状（ウクライナ、アフガニスタン、ミャンマー、スリランカなど）をニュースでみる度に、心が痛くなる反面、平和を享受できていることへの安堵なのか、強烈な“幸福感”を抱くようになってしまった。つまり、他人の不幸でしか自分の幸福を自覚できなかったのである。とても恥ずかしいことであると思うが、ここでとどまらず、だからこそ自分のやるべきことを果たそうという使命感が一層強くなったとも感じる。「家族を守ること」と「教育」である。

新型コロナウイルスの感染拡大により、現高校2年生（第10期生）の海外研修旅行の道は閉ざされてしまった。不可抗力とは言え、とても申し訳ない思いでいっぱいである。しかし、国内の研修旅行として、昨年先輩が訪問した長崎に加え、広島への訪問を視野に入れている。国内

において世界を観ることができ、そして歴史（過去）と希望（未来）をつなぐことができる機会になるはずだと確信している。そういった経験を提供することや、1年に1度だけ執筆の機会が与えられる、このたった1枚の機関誌によって、平和への祈りを伝えることができれば、教育者としての使命を果たすことにつながるのだと期待している。

明日からは学習合宿がある。学業とは未来への投資だと思う。物事を知り、世界を知り、未来を変えに行くのだ。